

― 郷土の人物紹介 ―

松山琴谷・味間親子

松山琴谷は、名を筠、別号を観堂、消夏樓、通称を察右衛門といひます。

江戸時代に当地屈指の豪商として隆盛を極め、糸魚川藩の町年寄を務めた名門・松山家の第九代当主として歴史にその名を刻みます。

琴谷は、少年時代に江戸の詩人・安達清河の門下となり、のちに京都に遊学して那波魯堂に漢学を、江村北海に詩を学びます。詩や書画に優れ、「稀有の秀才」と称されました。

父・濃水（本名・清）の隠居により松山家を継いでからは、商売と政治にも辣腕を振るい、糸魚川藩を凌ぐともいわれる財を成しました。

ところが文政2年（1819）9月13日、幕府御用金の調達をめぐって郡代黒川九郎治とその周辺の人々が民衆の反感を買い、「黒川騒動」と呼ばれる一揆が勃発。松山一族の屋敷も「目も当てられず、ことばにも述べがたく」「人間の仕業とは思へ」ないほどの激しい打ち壊しに遭いました。

さらに、騒動の後始末として黒川郡代は「御役御免」、松山家は「閉門」の沙汰が申し付けられます。

家財も地位も名声も、すべてを失った琴谷は絶望し、昔のつてをたどって

京都へ移住したと伝えられます。

後世「悲運の詩人」と呼ばれた琴谷には二男二女がいました。未間は、その末子で名を寿、字を君禎、通称を治五郎といひます。

黒川騒動の後、近在の叔父・松山良八の養子となり、のちに京都に出て貫名海屋に弟子入りし、書画等の指導を受けました。

やがて糸魚川に帰った未間は、政治や経済に一切関心を示さず、ただ文芸探求にのみ力を注ぎ、文化人として町内の人々に認められ、尊敬されたといひます。

晩年は絵画に打ち込み、「書道の法は山水画の基礎である」との持論を唱え、多数の秀作を残しました。明治9年（1876）没、年齢不詳。

郷土の政治、経済、文化の一時代を担った傑人にも関わらず、二人に関する記録は少なく、琴谷においては生年と没年、未間においては生年と職業が分かっていません。

解説

松山家の子孫

第十三代当主の高吉（後述）が残した「松山家系図」によると、江戸時代初期に高祖（初代）高野恒幸が家を興し、太祖（三代目）清右衛門のときに松山に改姓したとあります。

当時の商家には珍しく、学問を重んじ、文芸を趣味とする家風で、優れた人物を多く輩出しました。

明治維新の志士「越後三郎」として知られる松山良造（または良三、天保10年〜明治25年、号は良斎、鶴巢）は、琴谷の孫にあたります。

良造は、青年時代に京都へ出て池内陶所、頼三樹三郎に学び、勤王の諸士と交わり、奥羽諸藩を遊説しました。

元治元年（1864）、新撰組による「池田屋事件」に居合わせて九死に一生を得たり、「蛤御門の変」では長

州軍に加わって敗走したりしますが、三十歳のときに東征大総督有栖川宮熾仁親王の護衛となって江戸城入城を果たし、のちの明治政府では海軍省に勤務しました。

また、新島襄のもと、同志社英学校

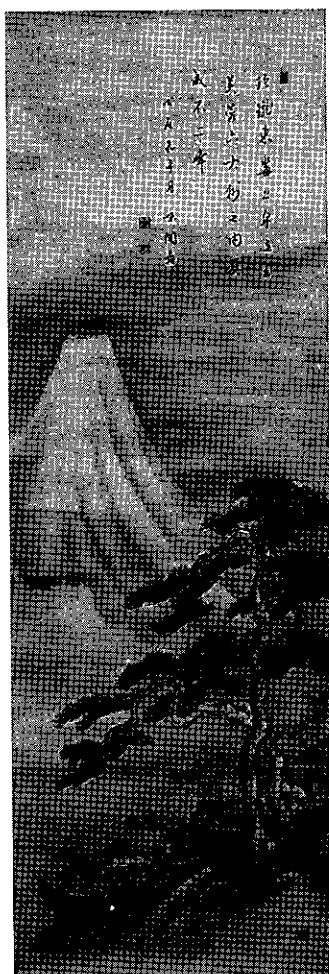
（現同志社大学）の設立に奔走した松山高吉（弘化3年〜昭和10年、本名は正温）も一族の出身です。

日本初の全訳『旧約聖書』『新約聖書』の編集に尽力する一方、同じく日本初となる讃美歌の編さんに参加、自らも作詞を手がけるなど明治大正期のキリスト教界に大きな足跡を残しました。

【参考文献】

『糸魚川市史3』（糸魚川市役所編・青木重孝監修・昭和53年）
『小城下文人伝』（磯野繁雄著・平成4年）

『図録 郷土糸魚川の人物』（糸魚川市教育委員会編・平成11年）



松山未間 「富士図」



松山琴谷 「山水図」